

国内出張報告書（学生）

2012年 12月 13日提出

氏名	金 尚昊
所属	獣医学研究科 獣医外科学教室
学年	大学院 1年生
出張先	大阪国際会議場（グランキューブ大阪）
出張期間	平成 24年 11月 16日～平成 24年 11月 18日
目的	動物臨床医学会年次大会への参加および発表

### 活動内容

申請者は現在、当研究科外科学教室において自らの博士論文の作成のための研究と並行し、獣医師として大学附属動物病院における診療に参加している。外科学は多岐の分野の知識が必要不可欠な学問であり、また、経験も重要なファクターであるためその習得には長い時間が必要になる。現在、北大動物病院外科診療科では、整形外科、軟部外科および腫瘍外科の患者について多く診察を行っており、申請者自身も外科診療科においてこれらの疾患で苦しむ多くの患者を診察する機会を得ている。その中で経験した貴重な症例について、治療法やその結果などをこれまで北海道内の学会で発表する機会を得てきた。今回参加した動物臨床医学会は毎年 11月に大阪で開催され、全国各地から多くの獣医師、動物看護師および獣医学部学生が、それぞれが経験した症例や研究について発表を行う、全国規模の獣医学会の一つである。また本学会は症例発表と共に、多くの講演者を招いた教育公演にも重点を置いており、今年も日本各地から各分野の第一人者とされる著明な獣医師を招いた講演が数多く行われた。

学会は 3日間行われ、1日目には夕刻からのイブニングセミナーが開催された。申請者が参加した講演は心臓エコーおよび血液学に関するものであった。心臓エコーに関する講演では、心臓へのエコープローブのあて方から、各種疾患における特徴的なエコー所見について多くの画像や動画を交えた講演であり、心臓エコーに関して全くの初心者でも理解しやすく構成されたものであった。血液学の講義でも、同様に基礎から応用まで幅広い範囲を網羅した講演構成になっており、あまり触れることのない分野に関しても多くを学ぶことが出来た。

2および3日目は症例・研究発表および教育講演行われた。申請者も学会 2日目に自らの症例発表を行った。発表は「経皮的尿管ステント設置術を実施した犬の 5症例」という題で行った。発表の概要は、膀胱または前立腺腫瘍により尿管閉塞を呈した犬 5例に対して、尿路の開通性を確保する目的で、経皮的尿管ステント設置術を実施し、それについて考察を行ったものである。本法の結果として、ステントを設置した全て

の症例で通過障害が解消した。また、対象症例は小型～中型であり、様々な体格の犬種で本法が適用可能であることを示した。また、ステントの脱落や破損なども認めず、尿道閉塞に対するバルーン拡張術またはステント設置術との併用により、より長期的な尿路の開通性が維持されたとことを発表した。以上のことから本発表では、経皮的尿管ステント設置は非侵襲的かつ比較的簡便であり、尿路系腫瘍疾患を患った動物のQOL維持のための有用な手段であると考えられるという結論に至った。また、今後は、適用症例の体格、適切なステントの大きさおよび設置法の更なる検討の必要性も示した。

今回、リーディングプログラム「one health に貢献する獣医科学グローバルリーダー育成プログラム」による、援助を受け本学会に参加する機会を得たが、本学会への参加から、全国規模の学会におけるプレゼンテーションを経験できたことは自身にとって貴重な体験になったと考える。また、発表時のフロアーとのディスカッションや、発表後の会場外での他の発表者とのディスカッションは、自身の臨床への更なる理解を深めるとともに、獣医臨床に対して同様の興味を持って現場にいる方との有意義な意見交換の場となり、更なる臨床への探求心を刺激されるより良い機会であった。さらに、多くの講演を聴くことでこれまで触れることのなかった分野についても幅広く学ぶ機会となった。今後、今回の学会で得た経験も踏まえ、臨床の現場でさらなる経験を経て、自身の能力の向上を目指していきたいと考える。

## 経皮的尿管ステント設置術を 実施した犬の5症例

○金 尚興<sup>1)</sup> 細谷謙次<sup>1)</sup> 睦良田尚充<sup>2)</sup>

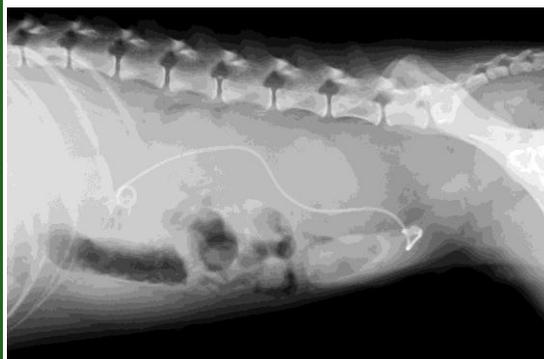
星野有希<sup>2)</sup> 高木 哲<sup>1)</sup> 奥村正裕<sup>1)</sup>

1) 北海道大学大学院獣医学研究科獣医外科学教室

2) 北海道大学附属動物病院

発表スライドの一部①

### ステント設置後



発表スライドの一部②